

七月十二日 勉強会 佐伯啓思『自由とは何か』四章～六章 発表者：栗山はるな  
参加者：嶋田・十河祐子・十河晃太郎・岩瀬・久富 記録者：久富

<最近の事件>

<レジュメに沿って四章から五章まで発表>

○リベラリズムのイメージは？

リベラリストとは？

・リベラリズム…米と欧で違う

そもそもはイギリス・ヨーロッパの伝統。アメリカでは反共和党＝民主党（リベラル）

共和党：自由主義…Cタイプ（福祉主義）

戦後：ハイエク・フリードマン：共産主義に対抗するため。

リバタリアニズム…Aタイプ

ヨーロッパ…個人主義・自由主義的なものがリベラル

【欧】保守 vs. リベラル（ロック等）＝自由主義・個人主義

⇔社会主義・共産主義

←ヨーロッパのリベラル＝アメリカの保守

【米】保守（自由主義・個人主義） vs. 社会主義・社会民主主義（アメリカのリベラル）

vs. 新自由主義（サッチャー・レーガン）

80年代頃

（リベラリズム vs. コミュニタリアニズム（共同体主義）  
（ロールズ） （テイラー・サンデル・ウォルツァー・マッキンタイア）  
《個人の自由》 《共通善・道徳》

アメリカの学者パットナムが、その著書『孤独なボーリング』でアメリカの社会資本（ソーシャルキャピタリズム）について論じているようだ。ここでいう資本とは経済的な意味ではなく、社会が内包する地域コミュニティなどの人間関係力のことを言う。アメリカでは一人でボーリングに興ずる人々が増えたそうである。

そもそもアメリカに地域コミュニティのようなものがあるのかという疑問が出された。アメリカでは個人の自由・権利が確立されていたからリベラルが受け入れやすいのか。

→アメリカにもコミュニティはある。

本来アメリカには宗教的共同意識に基づいたコミュニティがあった。（フランスの学者トクヴィル『アメリカの民主主義』）

○価値という言葉の意味は？

“価値”という言葉のイメージを聞いてみるとすぐ「値段」という答えが出てきた。通常、価値といえば経済的文脈から連想されるだろう。しかし例えば、看護婦が好きだ・宇多田ヒカルが好きじゃないなどと言えば、私とは価値観が違うという答えが返ってくるだろう。この場合の価値観という言葉は、嗜好に置き換えられるのではないか。三島由紀夫の言う価値とは、「自分の生命をかけて達成すべきもの」である。

○価値・嗜好・利害の違いは？

現代は価値・嗜好が同一的に扱われている。価値観という言葉が氾濫している。

価値 { 事実（～である）  
        { 当為（～すべき）      という意味を持つ。

→各々に「真・善・美」があり、真であり、善であり、美であるからこそそこに“～すべき”という当為の意味が生まれる。

単なる事実だけを述べる“好き”と“すべき”は違う。

○何が真・善・美なのか…共通理解はあり得ない。

リベラリズムの考え方では、何が「真・善・美」であるのかは個人で考えればよいことでありそのことに関しては触れないが、それを選択する環境はととのえろと言う。

価値判断をする際、誰も「真・善・美」の基準を持ち合わせているはず。しかしそれを表に出すことはせず、ただ好きとか良いと言った「事実」しか言わない。

例えば、友達に何か悩み事を相談された時に、あなたの好きにすればいいよという答えは意味があるのだろうか。これは無意識にリベラリズムに陥っているのではないか。B z 好きの二人の人間がいるとすると、ただこの曲が好きだ、あの曲が良いということしか言わず、どう良いのかということには触れない。さらに、美術館めぐりについても同様である。どの絵のどこにどう感じたかというようなことは言わず、ただ良かったと言うだけである。これらの例については、好きだという共通認識の存在が前提となっているので、深い話には及ばないのではないかという意見が出た。他には、自分の価値観が否定されることを避けているのではないか、好きなものが“一緒”ということに安心してしまって、（相手に対して）それ以上のことに興味を持たないのではないかという意見が出た。

また、「ださーくる」（駄サークル？）という例が出された。サークル活動において、まったく批判することをせずただお互いを褒めることしかししないサークルを総称して「ださーくる」というそうだ。ここに、とにかく衝突を避け本質について語らない、価値相対主義の傾向が見られるのではないか。

### ○価値相対主義は可能か

相手にダメと言えない。自分はそれが嫌いだとは言えるが相手が間違っていると面と向かっては言えない。価値相対主義を保ったまま生きるのは不可能。価値判断は必ずしている。

価値相対主義について、たばこを吸う、吸わないということについての例が出された。

Aは、たばこは健康に良くないので吸うべきでないと考え、Bは、たばこを吸うと作業能率が上がるし人間関係も円滑にするので吸うべきだと考えている。ここで、AとBは自分の考えに信念を持っているので、たばこを吸うべき・吸うべきでないと議論しても、相手の考えを変えることはできない。すぐに「そう言うなら吸えば・吸わなければいい。自分はもう何も言わない。(個人の嗜好に口出しはしない)」と相手のことを認めるが、心の中では「吸う・吸わないなんて、理解できない」と価値判断をしているものだ。

AとBが友人である場合もまた、お互いに自分の主張が善だと思っていてお互いのことを考えて言っているにもかかわらず、議論は平行線をたどるだろう。しかし、お互いに理解や説得はできないが、信念を持って議論を戦わせることで初めて、相手のことを認めることができるのではないか。

内村鑑三は、「真の寛容とは、確固たるものがあって初めて他人を許容できる」と言っているそうだ。

結局は、相手に対して価値判断をすれば自分がその責任を負わねばならない、その責任を負いたくないがために、往々にして価値相対主義に陥るのではないかという意見が出た。

たばこに関して、近年のファシズム的とも言える徹底した禁煙運動の広がりには、リベラリズムが関係しているのではないかという意見が出た。喫煙者を隔離し、見世物のような喫煙スペースを設置していくなど、「喫煙は悪」というような世の中の流れに反論ができない状況に陥っているのではないか。

リベラリズムの隠れた前提に生命至上主義がある。この流れはホップズの社会契約論から来たのだろうかという問いに、ベンサムの功利主義ではないかと指摘があった。功利主義では最大多数の最大幸福が至上命題であるため、快楽が物事の基準となり、自己犠牲はあり得ない。その結果、健康であることが至上命題となる。

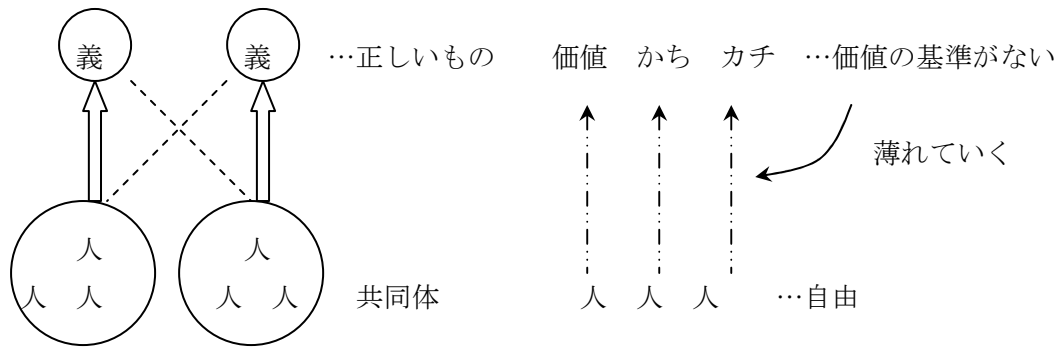
功利主義に関連して、メンバーのエピソードでは、高校時代の文化祭のクラスを挙げて取り組むべき劇で、一生懸命に練習して努力するより今が楽しければそれでいいという雰囲気になり、自分は一生懸命すべきだと呼びかけたが無駄で、何とも言えない違和感があったという。

<続いてレジュメに沿って六章の発表>

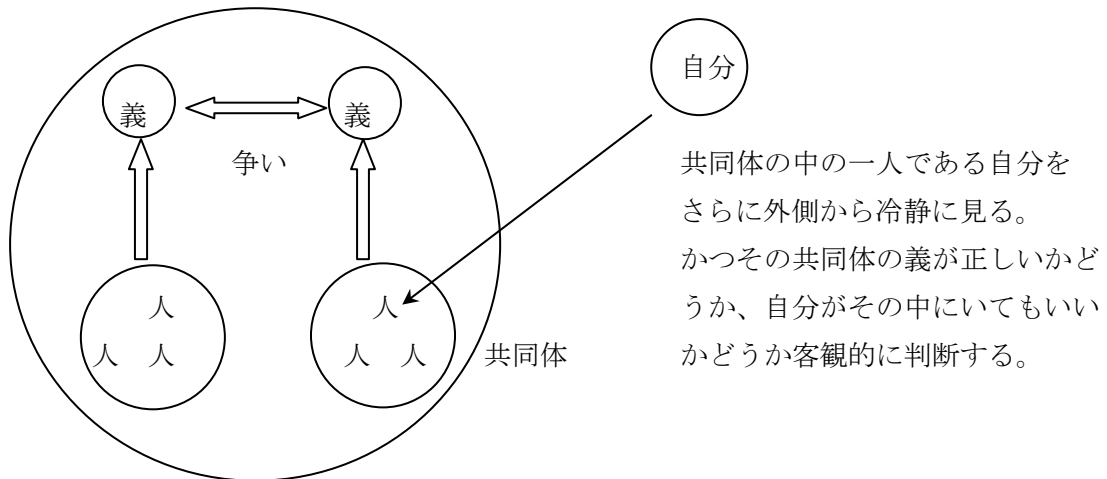
ここでは主に“義”について話し合った。メンバーから出された義のイメージを示す。

義のイメージ①：共同体としての義が確固とあり、他もある程度許容できる。

→中庸・中道



義のイメージ②：義を信奉している自分を認識する。



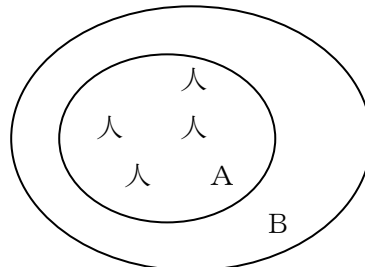
○犠牲の上に成立しているものが義なのだろうか。

犠牲でなくとも、愛する家族を守るために日本をどうにかしたいということも義ではないのか。では義が対立する場合についてはどうかということで、赤穂浪士の例が出た。

Aの義 (赤穂藩)



Bの義 (幕府)



自分の仕えるAの義と、Aが仕えるBの義が対立した時、Aのために自分の利益を犠牲にして殉ずる。

レジュメ 3 枚目、「あらゆる社会はその価値や文化、誇りを維持しようとするものであり、それには犠牲がともなう」ことについて。犠牲に基づく負い目が共同体を作る。例えば、共同体の維持のために犠牲になるとは、戦争で亡くなった方々について言えるのではないかという意見が出た。

昔の日本人が受け継いで子孫が伝えてくれると信じ、死んでもなお守ってきたものだから、われわれも文化、伝統を繋げていかなければいけないのではないか。

“義”の前提には“死”があるのではないかという意見が出た。  
死についての距離感・態度も関係があるのではないか。

○犠牲とはどんなものか。

死でなくとも、例えばしょう油店の息子が自分の夢をあきらめてしょう油店を継いだが、そのしょう油店独自のしょう油が昨今の日本食ブームで世界的に有名になり、そのしょう油店はもとより日本にも多大な利益をもたらした場合も、ある意味で犠牲と言えるのではないかという意見が出た。プロジェクト X で取り上げられるような名もなき人々の犠牲。永続させるための人間の悲しみを伴ったものが犠牲なのではないか。

しかしこれら先人の犠牲の上に現在が成り立っているのだと、実際に感じる事ができるだろうか。ただ自分がまったくの偶然で、犠牲者とならずに現在も生きている、その一方で、これまでの犠牲者のことを考えながら日常生活を送ることは不可能である。家族の範囲内ならばまだ感じることはできるが…。

では自分たちはそれをどう感じればよいのだろうか。それには想像力しかないのだろう…

○どう生きていけばよいか。

人を殺してはいけないと実際には教えられない。  
宗教には制裁があった。科学の進歩が原因。昔は自然科学を信じるのがすなわち神を信じることだったので科学者は同時に熱心な宗教家でもあった。デカルトは熱心なキリスト教徒だし、アインシュタインはユダヤ教徒だった。しかし自然科学の高まりによって、世の中に科学で証明できないものはない＝自然科学こそが“神”になってしまった。結果宗教的なものが衰退するという大きな矛盾が生まれる。

なぜ途中からお金がすべてになるのか。本来は宗教を实践すれば勤勉さの象徴として自然に得られる副産物だったはず。

宗教が消え、金を稼がなければならぬという観念だけがなぜ残ったのか。

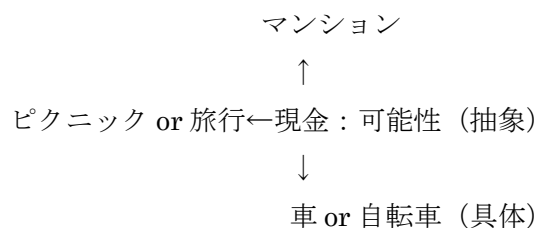
⇒手段が目的化したのではないか

## ○手段の目的化

なぜ手段としての金儲けだけが残ったのか。

〔嶋田論〕

現金には可能性がある。金の多寡によって抽象的だったものが具体的になる。



ハンナアレントの『人間の条件』

望遠鏡の発明によって遠くのもの（天体など）が見えるようになった。限りがなく、その先をただ想像するしかなかった時代は終わり、世界の全貌が把握できるようになった。

お金自体に人間を惑わせる何らかの力があるのではないかという意見も出た。

しかし、五千円を持ってお昼ごはんを何にするかあれこれと考えている間はうきうきと楽しいが、いざ実際に買ってしまうと、なんだこんなものかという軽い虚脱感を覚えるという意見も。

手段の目的化の例として、東京の学生は就職のために大学に行くという感覚を持っているということが挙げられた。自分のしたい勉強をするためではなく、就職に有利不利という観点から大学を決めるそうだ。しかし大学で学ぶ時間は、決して良い就職をするためだけにあるわけではないのではないか。そこにはもっと大切なものがあるのではないかという意見が出た。

そこから、メンバーがどうして今の進路を選択したかという話になった。